

新潟県立大学・県立新潟女子短期大学生活協同組合の教職員フォーラム（教職委員会改め）が中心となって編んでいる推薦図書冊子『どこでもドアのかぎ2011』が完成しました。本学教職員が在学生や卒業生へ推薦する図書を紹介するこの小冊子は1997年から始まって13号目になります。各教職員の専門や趣味などとの関連で選ばれた分野を超えた本が、分かりやすく解説されていますので、この冊子を読めばみなさんの読みたくなる本が必ずや見つかることでしょう。みなさんを新しい世界に案内する「ドラえもん」のような冊子でありたいと教職員一同願っております。

どこでもドアのかぎ 2011 目次

Howard Brown	(国際地域学部 国際地域学科)	3
板垣俊一	(国際教養学科／国際地域学部国際地域学科)	4
石川伊織	(国際教養学科／国際地域学部国際地域学科)	6
山中知彦	(国際地域学部 国際地域学科)	10
堀江薫	(国際教養学科／国際地域学部国際地域学科)	11
宮西邦夫	(食物栄養専攻／人間生活学部健康栄養学科)	12
渡辺しのぶ	(図書館司書)	14
山田佳子	(国際教養学科／国際地域学部国際地域学科)	15
太田正之	(英文学科／国際地域学部国際地域学科)	17
澁谷義彦	(英文学科／国際地域学部国際地域学科)	18
David Coulson	(英文学科／国際地域学部国際地域学科)	19
藤井誠二	(国際地域学部国際地域学科)	21
柳町裕子	(国際教養学科／国際地域学部国際地域学科)	22
小谷一明	(英文学科／国際地域学部国際地域学科)	24
福嶋秩子	(英文学科／国際地域学部国際地域学科)	26
村松芳多子	(食物栄養専攻／人間生活学部健康栄養学科)	27
小澤薫	(生活福祉専攻／人間生活学部子ども学科)	28
水上則子	(国際教養学科／国際地域学部国際地域学科)	28
黒田俊郎	(国際教養学科／国際地域学部国際地域学科)	30
荒木和華子	(国際地域学部 国際地域学科)	32
太田優子	(食物栄養専攻／人間生活学部健康栄養学科)	34
若月章	(国際教養学科／国際地域学部国際地域学科)	36

The Omnivore's Dilemma

Michael Pollan Penguin

雑食動物のジレンマ（上下）—ある4つの食事の自然史

マイケル・ポーラン ラッセル秀子（翻訳） 東洋経済新報社

This is the book that inspired my interest in Food Security. Pollan writes about 4 traditional meals, using each as a chance to analyze the current state of the world food system. He describes the way the world ate before industrialization and globalization, issues with the current system and options for change. It is a very thoughtful book but also a fun book to read because of Pollan's light and entertaining writing style. The Omnivore's Dilemma is available in both English and Japanese.

日本語が亡びるとき 一英語の世紀の中で

水村美苗 筑摩書房（2008）

著者は、十二歳の時、父親の仕事の都合でニューヨークに移り住んだが、アメリカになじみず、ひたすら日本文学に親しみつつ少女期を過ごしたという。また、イエール大学・大学院では仏文学を専攻している。英語はもちろん堪能であるが、日本語の作家でもある。本書の内容は英語圏の大学で日本近代文学を教えた経験によるところが大きいと思われる。本書が日本人にとって衝撃的な題になっているとおり、日本語が亡びないうちに考えなければならない問題を扱っている。

私が高卒で某電気会社に入社した時代は今から五十年近く前の電子工学が盛んなころであった。そのころすでに（と言うか、もちろん）電子通信技術の分野でも英語論文を読まなければ仕事ができない時代であった。ただし、私個人は会社を辞めて大学に入学し、日本史・日本文学を専攻することになったので、英語を真剣に学ぶことは考えなくなった。その当時の大学では外国語として英語が必修だったけれども、単位修得のためにおさなりに勉強した学生も多かったと思う。また今日では影が薄くなったフランス語、イタリア語、ドイツ語、スペイン語などがどの大学でも第二外国語としてカリキュラムに用意されていた。その第二外国語は、西洋の文化思想であればフランス語、歴史や芸術であればイタリア語、哲学や医学であればドイツ語と、学生は半分仕方なしに学ぶ英語のほかにそれぞれ自分の関心のある言語に大きな興味を持った時代だった。すなわち、すでに英語の時代に入っていながらもまだフランス語やドイツ語が大学では重きを置かれていたのである。実際、サルトル以降のフランスの思想は大きな魅力をもって日本人に影響を与えてきた。

本書の著者水村美苗は次のように述べる。学問とは本来〈普遍語〉（西洋では古くはラテン語）で行なわれるべきものがあったし、現代世界でも英語という〈普遍語〉が世界の多くの地域で学門の言葉となっている。しかし十八世紀後半から二〇世紀にかけての国民国家の時代には〈普遍語〉のラテン語ではなく自分の〈国語〉で学門書を書く知識人たちが増え、〈国語〉の時代を迎えた。西洋においてはフランス語・英語・ドイツ語が主要な〈国語〉となり、知識人たちはそのうちの自己が属する現地語で書いたのである。後進国であったロシアでも十九世紀にはロシア語による書物が隆盛を迎えた。そこにはある特徴を見ることができる。つまり、プーシキン、

ゴーゴリ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、トルストイ、チェーホフなどの文芸家が多く輩出されたことである。フランス文学、ドイツ文学もこの〈国語〉の時代に栄えた書物であった。二十世紀になって再び知識人たちが英語という〈普通語〉で物を書くようになったことと〈文学〉の衰退は表裏の関係になっている。すなわち小説が輝いた時代は〈国語〉の時代という一時期のことだった。その時代は学問の言葉である〈普通語〉が衰微し、かわりに〈文学の言葉＝国語〉が学問を越えて存在したときであった。これによって〈文学・Literature〉は、漢語の〈文学〉と似て、西洋でも書かれたもの一般を意味し、〈学問〉と〈文学〉とは未分化のものであったという。

十九世紀の日本近代文学の始発期は、まさに西洋では後進国だったロシアの〈国民文学〉から大きな影響を受けている。日本における〈国民文学〉の時代もそれによって始まったといってもよい。そして二十世紀の末にはその文学の伝統は消え、ネット小説の時代になった。このことと〈国語〉の時代の終焉、英語の世紀の到来とは表裏の関係にあると著者はいう。

日本語は、著者が述べるように、幸いにして漢語の伝統を背負いながら、西洋語を巧みに翻訳して学問的な著述が可能な言語になっている。しかし高度な論文が書けたとしても読者は日本語が読める者に限られる。そのため、自然科学のような、地域性と無関係な学問では、英語で論文を書くのが当たり前になっている。さらに社会系の学問の場合でも次第に英語が中心になる傾向が出てきているようだ。

一つの研究テーマにつき世界で生産された論文が十万件といった例もあるだろう。そう考えれば、たとえ英語で書かれていようとも（あるいは英語で書かれているがゆえに数ある論文の中に埋没して）読まれない論文はやはり存在するだろう。

ことコミュニケーションの手段となると話は別である。欧州がEUとして統合されたように、最近アジアでも統合を模索する動きが出てきた。そのときコミュニケーションに用いられるアジアの共通言語は何か。最も使用者が多い中国語であろうか。中国・台湾以外の国家のプライドはそれを許さないだろう。アジアを越えて流通するに至った言語である英語しか考えられない。現代日本の大学教育で課題になっているのも英語教育である。例えば2011年正月11日付の朝日新聞の社説「国境を越える若者・アジア支える大学教育を」でも英語が共通言語となることを説く。今後百ないし二百年間はこの傾向がいつそう強まるだろう。

しかしまた、人口が減少しても一億人近い人々が暮らす日本列島で日本語が単なる住民の言葉に成り下がることは決してない。「英語か日本語か」ではなく、「英語も日本語も」でなければならない。そんなことを考えさせてくれる一書である。

補記：英語と向き合った明治期、日本人がどのような選択をしたかを振り返るために、もう一冊、夏目漱石の『三四郎』を推薦しておく。併せて読むといいだろう。

レインツリーの国

有川浩 新潮文庫 ¥400+税

ネットで知り合った二人。メールのやり取りでだんだんと彼がその気になっていくのだけれど、会おうという誘いに彼女が乗ってこない。実は彼女には聴覚障害があって……というお話。心を開いていく過程は相手を受け入れる過程でもあって、相手を受け入れないことには相手に受け入れてもらえないし、心を開いてもらうためには自分から開かないというけない……という真理が、ストーリーの中にちりばめられているメールのやり取りで展開されていきます。メールの文章はゴシック体で表記され、しかもベタな関西弁。なかなか心打たれる物語です。同じ著者の『阪急電車』（冬幻舎文庫 ¥560+税）もおすすめ。

江戸絵画の不都合な真実

狩野博幸 筑摩選書 ¥1800+税

タイトルがいいでしょ。内容も過激です。信長に楯突いて滅ぼされた荒木村重という武将がいたのですが、岩佐又兵衛という絵師はその荒木村重の遺児なのですね。で、心理学の本なんかでは、それが又兵衛のトラウマになっていたと説明するのですが、トラウマを克服したから絵師又兵衛が生まれたのであって、トラウマは解消してはいけないのだ、というのが狩野さんの言い分。ほかには、東洲斎写楽には謎も何にもないとか、植物やら象さんやらクジラばかり描いていた伊藤若冲は、実は京都錦小路市場の八百屋のおっさんで、余所の市場関係者から賄賂をもらって錦小路を潰そうとしていた町奉行に対する戦いの指導者だった……などなど。ネットで見たのですが、狩野さんは『秀吉の御所参内・聚楽第行幸図屏風』（青幻舎 ¥2500+税）という本も書いていて、カラーの図版がきれいです。

史料を読み解く 4 幕末・維新の政治社会

鈴木淳・西川誠・松沢裕作編 山川出版社 ¥1900+税

人文学を勉強しようと思ったら、原典を原文で読まなくてはなりません。歴史学では原史料にあたらないといけません。本書は、崩した字や異字体が満載の手書きの古文書を読むための教科書。解説というに近いですね。中世から江戸時代までを扱う一巻から三巻につづいて、ここで紹介しようとしている四巻目が幕末から明治です。とはいえ、原資料です。資料の生々しさも半端ではありません。たとえば、86ページ以下に掲載の「鉄道局へ御回答案」と題する1886（明治19）年12月24日の日付をもつ陸軍総務局作成の文書です。この年の7月に、政府は東京-大阪間の鉄道計画を中山道ルートから東海道に変更しています。この文書は、「東海道へのルート変更は仕方ないが、今後は鉄道のルート決定には陸軍の意向を聞いてからにしてくれ」という陸軍の回答書の下書きです。しかし、日付がおかしくはないですか？ 閣議決定して東海道本線の建設が始まってから5か月も後に、政府はただ形式的にのみ、陸軍に「路線を変更したけどいいか？」と尋ねているのです。陸軍は仕方なしに返事をしてます。昭和に入ってから陸軍なら、こんなことをされたら陸軍大臣の引き上げを強行して、政府を混乱に陥れていたでしょう。なお、この間の経緯については、拙著『「裏日本」文化ルネッサンス』第8章「鉄道と文学と「裏日本」」（社会評論社 2011年）も読んでね。

一丁倫敦と丸の内スタイル

三菱一号館からはじまる丸の内の歴史と文化

岡元哲志監修 求龍堂 ¥2000+税

おとし、三菱一号館が復元されたと聞いて、東京駅前まで見に行きました。再開発された丸ビルをはじめとする超高層ビルが林立する東京駅前の丸の内一帯は、実は日本有数の近代化建築が林立する街です。ファサードが保存されて再建された日本工業倶楽部会館や東京銀行協会もあれば、重文指定の明治生命館、GHQが入っていた第一生命相互館もあります。そもそも東京駅が創建時の姿に改修中です。その中でもひととき目立ったのは、一時は取り壊されていた三菱一号館の復元工事でした。その復元成った三菱一号館の前に立って後ろを振り返ると、そこには破壊され瓦礫の山と化した東京中央郵便局の記念碑的な廃墟が傷口をさらしていました。明治初期の赤煉瓦の建物は解体されましたが、三菱一号館の復元という形で再び姿を現しました。大正の東京駅は今でも健在です。しかし、関東大震災からの復興のために導入された最新技術である鉄筋コンクリート造りのオフィス群は、東京中央郵便局のオフィスがそうであるように、コンクリートの耐用年限を向かえて次々と壊されています。中央郵便局の建物を破壊した当時の政府は政権交代してしまいましたが、中央郵便局は元には戻りません。建物を大事にしない国なんですね、この国は。もったいないったらありゃしない。ブンブン！ この本は三菱一号館の竣工を記念して出版された写真集です。

甥の一生 第一巻～第三巻

西炯子 小学館

各¥400+税

この漫画、タイトルは「おとこのいっしょう」と読みます。東京の大手の電機会社のバリバリのキャリアをやってる堂園つくみが休暇を祖母の家で過ごしているうちに、その祖母が急逝。なんやかやで祖母の家に住みついたつくみですが、この家の離れの鍵を祖母から託されているという初老でドSの大学教授があらわれ、不良爺さんと30代女性の不可思議な同居生活が始まるのでした。この教授のドSぶりが筆舌に尽くし難いエグさ！ 許し難い爺さんですが、いいところを突いてもいるんですね。同じく西炯子による『うすあじ』『こいあじ』（新書館 ともに¥686+税）も困った面白さです。

空想お料理読本

ケンタロウ×柳田理科雄

株式会社メディアファクトリー 空想科学文庫 17

小池さんのラーメン／ラピュタの目玉焼きパン／ポパイのホウレン草／ハイジのチーズをのせたパン／ギャートルズのマンモスの骨つき肉／宝寿司・梅さんの寿司／キテレツ大百科のコロッケ／日本昔ばなしの大盛りご飯／ラムちゃんの手料理／銀河鉄道999のピフテキ／ハウルの厚切りベーコンエッグ／ハクシオン大魔王のハンバーグ／ナウシカのチコの実／チビ太のおでん／ルパン三世のミートボールスパゲッティ／この本には、不毛がぎっちり詰まっています……以上、目次。

新版 グローバリゼーション

マンフレッド・B・スティーガー 岩波書店

1800 円

「オサマ・ビン・ラディンのタイムックス社製の腕時計」から話を始めて、「グローバリゼーションの未来の評価」に至る本書の構成および途中での様々なフィルターを介しての概念の検討は、中身の濃い割に読みやすい入門書として極めて秀逸な一冊であると感じました。本学の様々な講義で「グローバリゼーション」が取り上げられると思いますが、これを読んでおくと講義の理解や自身の立脚点を定めるのに役立つと思います。

北越雪譜

鈴木牧之 岩波文庫（古文体）

小学館地球人ライブラリー（現代語訳）

越後の生んだ地元学の祖・鈴木牧之の著書。天保8（1837）年から天保13（1842）年にかけて刊行された本書は、魚沼地域を主に雪国越後の逸話を取材して江戸に紹介した名著。古文が苦手な方には現代語訳がお薦めですが現在絶版で、私はamazonの古本で定価1500円を2100円で購入しました。また同じ著者によるさらにディープな著書として、生前に刊行されることのなかった「秋山記行」がお薦めです。こちらは、文政11（1828）年、牧之59歳の時に知り合いの桶屋をガイド役として信越国境の秘境秋山郷を取材した、わが国初といわれるフィールドワークの記録として光彩を放っています。恒文社刊現代語訳が新本で1800円で購入できます。

偽原始人 ／ 吉里吉里人（上中下）

井上ひさし 新潮文庫

井上ひさしさんが亡くなってから、もう1年になる。私が、市川市の遅筆堂を訪ねて『偽原始人』に1980年5月16日付のサインをいただいた当時は、1階でうずたかく積まれた本に囲まれ、まだ好子夫人もいた【経歴や家庭状況等は『家庭口論』（中公文庫：続編2冊）や三女・石川麻矢さんの『激突家族』（中央公論社）等参照】。

苦勞人であるためか、著者の描く子どもも大人も、どこか気弱で優しく哀しいところがある。敬語量一定の法則を記した『私家版 日本語文法』（新潮文庫）も読めば、口下手で敬意をうまく表現できないことは決して悪いことではないことがわかり、ちょっと安心できる。田舎者が読む本の種類としては最適かも。合掌。

食物栄養専攻／人間生活学部 健康栄養学科 宮西邦夫

Stuffed and Starved

肥満と飢餓 世界フード・ビジネスの不幸のシステム

ラジ・パテル 佐久間智子 訳 作品社

なぜ世界で、10億人が飢え、10億人が肥満に苦しむのか？
世界の農民と消費者を不幸にするグローバル・フードシステムの実態と全貌を明らかにし、南北を越えて世界中で絶賛された名著

科学が証明する新朝食のすすめ

女子栄養大学副学長自治医科大学名誉教授 香川靖雄

女子栄養大学出版部

若者の生活はこんなに乱れています。検証 朝食を摂ると成績が上がります。朝食はどうして身体に良いのでしょうか。朝食は体内リズムを助けます。朝食で防ぐ生活習慣病、他

なぜ「牛乳」は体に悪いのか

医学会の権威が明かす、牛乳の健康被害

フランク・オスキー 弓場 隆訳、新谷弘美解説 東洋経済

本来、仔牛の飲み物である牛乳は、アレルギー、下痢、胃痙攣、虫歯、虫垂炎を引き起こす。あるいは、心筋梗塞、脳卒中、がんのリスクを高める。医学会、酪農・乳業界のタブーに挑戦し、米国で読み継がれているロングセラーの日本版。

がん再発を防ぐ「完全食」

済陽高穂 文春新書 721

がんと診断されたら何を食えばいいのか。何を食べてはいけないのか。進行がん患者に、6割強の有効率の「済陽式栄養・代謝両方」で、身体の内と外から、がん再発を防ぐ。塩分、動物性蛋白質・脂肪、野菜・果物、玄米・胚芽米、豆、イモ類、海藻、きのこ、ハチミツ、レモン、オリーブオイル、ゴマ油、自然水。

ダーシェンカ

カレル・チャペック

主人公のダーシェンカは、作家であるカレル・チャペックの家に生まれたワイヤヘアード・フォックステリアの子犬の名前です。このやんちゃで手のかかるダーシェンカが成長していく様子を、チャペックは溢れる愛情と鋭い洞察力で克明に描写し、写真に収め、イラストにもしています。さらには、奇想天外なおとぎ話まで作ってダーシェンカに読み聞かせています。

私も胴長のダックス姉妹と活動的なキャバリアの男の子の三匹を飼っています。週末はこの子たちのお世話だけで過ぎてしまいますが、この本を読んで、犬と一緒に過ごす時間が何物にも代えがたい楽しいものであることに改めて気づかされます。カレル・チャペックは20世紀初めに活躍したチェコの国民的作家で、ナチズムを痛烈に批判した小説を書いてゲシュタポから狙われていました。チャペックはナチスがチェコに侵攻する前年に亡くなっているのですが、チャペックの良きパートナーであった兄のヨゼフは強制収容所に送られています。

チャペックの代表作は、『長い長いお医者さんの話』『山椒魚戦争』『ロボット』という言葉を生み出した戯曲『R. U. R』などがあります。どれも独特のユーモアに溢れていますが、時折見せる辛辣な風刺にゾクッとするような怖さを感じます。

「ダーシェンカ」は、1933年にチェコで初めて出版されて以来、多くの出版社から出版され邦訳もいろいろありますが、おススメは新潮文庫版です。イラストのコメントが秀逸！

ショパン - 花束の中に隠された大砲

崔 善愛 岩波ジュニア新書

ピアノが少し弾けるようになったら、必ず挑戦してみたいくなる曲の一つがショパンの「子犬のワルツ」ではないでしょうか。トコトコと子犬の愛くるしさが表現されたこの曲の軽やかさからは想像ができませんが、ショパンの生涯は列強3国による分割・占領という祖国ポーランドの運命とともにありました。本書の著者は在日3世のピアニストです。彼女はかつて外国人登録のさいに必要とされた諮問押捺を拒否したために、日本への再入国許可が得られないままアメリカ留学へ旅立ちました。祖国を愛するがゆえにパリで亡命者として生きる道を選んだショパンの生き方に、著者は自らを重ねていますが、その語り方はあくまで冷静です。欧州の歴史をおさらいしながら、ショパンの音楽について知り、在日朝鮮人としての著者の思いに心を寄せることのできる一冊です。

楽しい私の家

孔 枝泳 蓮池 薫 訳 新潮社

主人公は大学受験を控えた女子高生。母はシングルマザー。2人の弟はそれぞれ父親が違います。つまり主人公の母親は3度結婚し、3度離婚しました。それはまさに著者自身でもあります。本書は、学生時代は韓国の民主化運動に身を投じ、作家としてはフェミニズム、死刑廃止などを積極的に社会に訴えてきた著者が、自らをモデルにしたフィクションです。家族のあり方に定義などあるはずがなく、3人の子供たちにとってはそこが紛れもなく自分の家なのですが、よその家と多少？違うことも確かです。母にしてもどうしたら娘たちを幸せにできるのかわかりません。それでも「楽しい私の家」とはいったいどんな家なのでしょう。私たちがドラマなどでよく目に見ている韓国の家族と比べてみてください。ちなみに訳者の蓮池薫氏は孔枝泳とは仕事を通して個人的にも親しいそうです。

お父さんとオジさん

伊集院 静 講談社

著者は故郷である山口県の港町を舞台にこれまでも自伝的な作品をいくつか書いてきました。そこは海運で栄えた町で、古くから様々な国の船が入り出していました。著者の父も戦前、朝鮮半島から渡ってきた海の男です。著者の育った家庭は父親が絶対的な権力をもつ世界でした。けれども戦後生まれの著者はそんな父に反発し、家を出ます。本書は著者が父との和解のために書いたものだそうですが、そのために父の強さを徹底的に描ききるという方法をとりました。なにしろ作品の中の父は朝鮮戦争さなかの韓国に密航し、幾多の危機を切り抜けて、ある目的を達成するのですから。どう考えてもあり得なさそうな設定なのに無性にハラハラさせられます。それは父の強さが見せかけの権力ではないことにすでに読者も気づいているからなのです。また一つの家族のあり方を見ることのできる作品です。

オーストラリア6000日

杉本良夫 岩波新書

オーストラリアと聞いて何を連想しますか。カンガルー、コアラ、グレートバリアリーフ、エアーズロックなどでしょうか。水泳のイアン・ソープ選手、小惑星イトカワから奇跡の帰還を果たした小惑星探査機はやぶさのカプセルが着地した砂漠を思い浮かべる人もいるでしょう。これらは、私を含む多くの人々がオーストラリアに対して持っているイメージであり、いってみれば外から見た表面的なオーストラリア像といってもいいかもしれません。一方、本書が提供してくれるのは内側から見たオーストラリアの姿であり、我々（私だけかもしれませんが）にとってあまり馴染みのない新鮮なオーストラリアの社会が描かれています。著者が大学教員として現地で暮らした6000日を通して見たオーストラリアの社会、人々の生活などがここにあります。卒業式で読み上げる学生の名前にまつわる苦労話から始まり、現地での生活、メディアに映る日本の姿、太平洋戦争の記憶など興味深い内容が次から次へと続きます。

大人の英語発音講座

英語音声学研究会 生活人新書（NHK 出版）

英語の発音と聞き取りに関する正しい知識を一般に広めようと結成された研究会が出版した「英語の発音と聞き取り」に関する本です。表題にある「大人」とは言語習得の臨界期を過ぎた中高生から中高年までの英語学習者を指しています。本書を貫く基本姿勢は類書によくありがちな「習うより慣れよ」ではなく「習ってから慣れよ」です。英語の発音や聞き取りに慣れる前にどのようなことを知っておくべきかに主眼が置かれています。英語音声学に興味があり学問として学ぶ意欲があれば、ぜひとも Gimson や Kenyon の著作をじっくり時間をかけて読んでみてください。しかし本書ではこんな学び方もありますよといわんばかりの気持ちのいいほどの「割り切った考え方」と専門書にはない大胆な試みが見られます。寝転びながらでも学べる気楽さがありますが、記述内容はしっかりしたもので安心して読み進められます。手っ取り早く英語の発音について学びたいと思っている人におすすめです。

悩む力

姜尚中 (Kang Sang-jung) 集英社新書

2008年 680円

現代人は「近代」以降様々な自由を獲得してきた代償として皮肉にも多くの悩みを抱えてしまっています。本書の中で著者は、現代人の孤独の苦しみ、変化に耐えねばならない苦しみなどがどこから生まれるのか、そのような苦しみにどのように向き合うのがよいかについて、在日コリアン二世である著者自身が引き受けざるを得なかった苦悩にも触れながら述べています。また著者は「文明が進むほどに、人間が救いがたく孤立していく」ことを見抜いていた二人の同時代人として、日本の作家夏目漱石とドイツの社会学者マックス・ウェーバーを紹介し彼らの小説や思想を解説していますが、語りかけるような著者の文章には説得力があります。現代人は悩むことから逃避せず真面目に悩み抜くことこそ大切であり、それによって自己を見失うこともなく、「生きる意味」を見いだすことになるかと述べるこの本は、苦悩する現代人へのエール（声援）のようです。

感動する脳

茂木健一郎 PHP文庫

茂木さんは近年大変人気を集めている人物となりました。NHKの「プロフェショナル」という番組の司会をして物凄い業績を積み重ねた人や実力者を紹介します。テレビを見ながら私は感動を感じるだけでなく、正直言うとちょっと劣等感の面もあります。「どうしたらあんなに立派な人間になれるかな～」と思わされます。そこで、茂木さんはこの小さい本を書いてくれました。彼は脳科学者として我々がベストを尽くして楽しく充実した日々の生活の送り方をナビゲートします。入学する人も在学中の人にも最適の本としてお勧めしたいと思います。茂木さんが良く説明しますが幼い子供達は自然界のあらゆるものとか絵本や音楽などに強く感動します。しかし年を取るにつれて好奇心がやや弱まる傾向が見られます。彼によると、生活の中の課題とか不安とか不確実性などが好奇心の妨害となり、かつての熱心から遠ざかったり、学習意欲が無くなったりします。対策としては自分の感情をコントロールすることが大切だそうです。例えばスポーツ選手が利用するイメージトレーニングが我々は日常生活にも適用できると説明します。不安あるいは不確実性のせいで立ち往生していればネガティブ脳になりやすいです。しかし、この状態から脱出してポジティブ脳に転じる方法があります。「心の持ち方次第で実際の脳細胞は活性化されるという確信です。前向きになれば必ず、その確実性は高まるという科学者としての確信です。」と茂木さんが書きます。楽しいものだけでなく、常に自分の周りにある気づかなくなったものを再発見したり、手が届きやすい可能性を認識したり行動したほうがよいと主張します。ちなみに個人的に言う外語の成功の1つのカギはやはりイメージトレーニングと私は以前から思っています。最近、基礎レベルの中国語を学んでいます。イヤホーンをかぶせて家へ歩いて帰りながら私は中国語ができる世界へ飛んでしまい、「はい、どうぞ。はいって、お茶を飲んで下さい」と空想の人物と対話します。茂木さんが書いたとおり私は感動します。なおかつ、30年以上前にフランス語を初めて覚えたときのスリルを感じます。このお陰で、この中国語会話がしっかりと定着してしまうと確信をしています。これからも中国語をもっと覚える心の準備ができています。と思います。「感動する脳」を読んだ後にこの小さいエピソードをここでシェアすることは何も恥ずかしくないと思いまし

た。新潟県立大学で勉強する皆さんもこういった少し無邪気な喜びで勉強してほしいと思います。しかし茂木さんからの警告もあります。心の中の余裕がなければ「創造性も感動も生まれない」と主張する。私は皆さんの大学生活が充実や感動に満ち溢れてほしいと思います。マイペースで大学の生活に取り組み生涯学習の良い習慣を身につけてください。最後に目からうろこを落ちさせるような本を読んでください。この一冊を読む価値が絶対にあります。

ヤバい経済学

スティーヴン・レヴィット、スティーヴン・ダブナー
望月衛訳 東洋経済新報社

大相撲に八百長が存在することを、すでに8年ほど前に、3万組以上に上る力士の取組結果のデータを分析して証明した著者による本です。その他にも、興味深いトピックがそろっています。

本のタイトルが少しふざけているため、若干抵抗感があるかもしれませんが、著者の一人のレヴィットは、将来のノーベル経済学賞の候補とも目される有名な若手経済学者です。

日本経済を学ぶ

岩田規久男 ちくま新書

1955年頃から1970年頃にかけての日本の高度経済成長はどのように可能だったのか。そして、1990年代初頭に起こったバブル崩壊以降、日本経済はどのようにして長期にわたって停滞しているのか、がわかりやすく解説されています。日本経済浮上に関するヒントが見つかるかも。

新訳チェーホフ短篇集

チェーホフ 沼野充義訳 集英社

チェーホフの短編集は数多く出版されていますが、これは代表作を含む十数編の短編を新たに訳したものです。チェーホフの作品は簡潔で軽快な文章で知られています。この新訳はその味わいの再現をより意識して訳されていて、読みやすい文体になっています。

一遍ごとに訳者・沼野氏による解説もついています。解説ひとつずつにテーマがあって、読むと「小説ってこんな読み方ができるんだ」という発見があるかもしれません。そういう意味で、「チェーホフって誰?」「文学って何?」という人にもぜひ読んでほしい本です。

現代言語論—ソーシャル、フロイト、ウィトゲンシュタイン

立川健二、山田広昭 新曜社

基本文献の読書案内という形をとりながら、ときにマンガなど身近なものを題材にしつつ現代言語論の基礎となる様々な視点を紹介している入門書です。

言語論は、言語学や文学だけでなく、記号論、精神分析、哲学、現代思想を論ずるための、つまりは、現代社会や人間について考えるために不可欠な視点となっています。でも、この本を教科書のように読む必要はありません。言語の不思議な世界を楽しむつもりで手に取ってみてください。そして、この本のなかに何かおもしろいと思えることが見つかったら、その次はこの本で紹介されている文献をぜひ手に取ってみてください。

きみの友だち

重松 清 新潮文庫

この本は、実は、他の大学の学生からすすめられた本です。読みだしたらさいごまで止まりませんでした。すすめた学生に「泣くよ」と言われましたが、はい、泣きました。映画にもなったんですね。皆さんの世代の方が読んでいる人が多いかもしれません。なので先生方、もし読んでなかったら、読んでみてください。

半分のぼった黄色い太陽

チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ
くぼたのぞみ訳 河出書房新社（2010）

ナイジェリア出身の米国作家アディーチェが2010年に出版した『半分のぼった黄色い太陽』には、1960年代後半から始まるナイジェリアのビアフラ戦争で住み処を追われたイボ族の青年ウグウが登場します。ハウスボーイとして働きながら次第に教養を身につけていきますが、ある日とうとう戦争に引きずり込まれてしまいます。ウグウは戦地で19世紀半ばの米国逃亡奴隷、フレデリック・ダグラスの書いた自伝を見つけます。英語を用いて彼が書くナイジェリア版「ダグラスの自伝」タイトルは、「わたしたちが死んだとき世界は黙ったままだった」でした。スーダン南部の難民を描くデイヴ・エガースの未邦訳『ワット・イズ・ザ・ワット』(What is the What)と並び、感銘を受けたルポルタージュ風フィクションの一冊です。

海炭市叙景

佐藤泰志 小学館（2010）

小説は岬の端にある函館山を舞台として始まり、そこから函館市（海炭市）の各所で起こる小さな出来事がゆっくりと並置されていきます。複数の場所の出来事に同時代の紗（うすぎぬ）がかぶせられ、バブルに突入する時代背景とは対照的に、自由に身動きのできない人々が印象深く描かれます。佐藤泰志（さとうやすし）の作品は長く絶版でしたが、近年クレインという個性的な出版社により復刊され、話題を呼びました。今では小学館文庫で読むことができます。映画『海炭市叙景』も製作され、4月1日までシネ・ウインドで上映されます。今春上映のカズオ・イシグロ原作『わたしを離さないで』と並び必見の映画です。

死刑台から教壇へー私が体験した韓国現代史

康宗憲 角川学芸出版（2010）

場所の来歴を知りたいとき、わたしはまず小説やエッセイを読むことから始めます。繰り返し訪れる韓国ですが、ことばの学習がおろそかで身近になったという感覚をなかなか持てません。そのなかで康宗憲（カンジョンホン）の本を手に取りました。獄中体験を通して説明される 1970 年代以降の韓国社会の変化は、強い衝撃を伴いますが理解しやすいものでした。60 年の半生を真摯に振り返る語り口は、ヴェトナム戦争を描くバオ・ニンの『戦争の悲しみ』、沖縄の読谷村（よみたんそん）を語る知花昌一の『焼きすてられた日の丸』に似た深い感動を呼び起こします。忘れがたい一冊に出会うことができました。

英文学科／国際地域学部 国際地域学科 福嶋秩子

外国人と一緒に生きる社会がやってきた！ 多言語・多文化・多民族の時代へ

河原俊昭・山本忠行編 くろしお出版

「在住外国人 200 万人時代の F・A・Q 集！」と帯に書いてあります。都市のみならず地方でも進む多文化化・多言語化は私たちが避けて通れない問題になっています。まずは何が起きているのかを知り、どうしたらよいのか考えてみましょう。

複数の日本語 方言からはじめる言語学

工藤真由美・八亀裕美 講談社

日本の方言の多様性を考えれば、国際化以前にすでに日本の言葉は多様であったのです。多様な方言の文法を切り口に、世界の言語と共通する普遍的な特徴が日本語の方言の中にあることが示されます。

働く。社会で羽ばたくあなたへ

日野原重明 富山房インターナショナル

99歳を迎えた今も現役医師として活動している著者が、若い20歳前後の子どもたちに向けたメッセージです。若者との会談を通して「働く」こととは何かを問うています。就職活動を控え、不安や迷いを抱えた若者たちや、働きながら日々自分を新しく発見する人たち、生きることの意味や自分の存在に疑問をいただく若者たちへ、働くこと・生きることの意味を考え、問い直す書物です。人生の重みも感じられます。今後の進路に迷ったら、是非読んでいただきたい本です。

別冊 Newton 知って楽しい身近な？ (だれかに教えて たくなる科学の不思議 36)

水谷仁編集 (株) ニュートンプレス

私たちの身近にある「もの」や「現象」などを、説明しようとする、実はわかっていないというものは意外と多いでしょう。身近なものを取り上げて、科学的にやさしく説明しています。正しい知識を身につけ、科学への興味を深めていただきたいと思います。

1. からだの“？”を科学する；金縛り、いびき、柔軟性、肩こりなど。2. 食べ物の“？”を科学する；まつたけ、インスタントラーメン、ビタミンCなど。3. 生き物の“？”を科学する；イヌとネコ、ゴキブリなど。4. 暮らしの“？”を科学する；電子レンジ、マスク、胃腸薬など。以上、4項目からなる36の不思議を紹介しています。

福祉が人を生かすとき

建石一郎 あけび書房

この本は、以前紹介したことがある「福祉が人を殺すとき」のシリーズです。そこでも触れられていた生活保護世帯の中学生に対するケースワーカーによる勉強会の様子、中学生の姿が記されています。これは24年前のもので、しかし、それは、24年間続けられてきました。東京都江戸川区におけるこの取り組みが、いま全国に広がり、新潟でも始まりました。江戸川では、勉強会に参加していた大学生がケースワーカーとして働くようになり、参加していた中学生がボランティアとして教えるようになりました。貧困の連鎖を断ち切ろうと始まった勉強会が、地域を越え、世代を越えて広がっています。

国際教養学科／国際地域学部 国際地域学科 水上則子

語学で身を立てる

猪浦道夫 集英社新書

外国語をなぜ学ぶのか。この問いには、いろいろな答えがあるでしょう。とにかく楽しいから、と答えられる幸せな人、単位を取らないと卒業できないから、と答える気の毒な人・・・皆さんの中には「外国語を生かした仕事をしたいから」と答える人が多いのではないかと思います。でも「仕事」のイメージがもてない、という方には、この本をおすすめします。どんな仕事があるか、何を目指して勉強するか、どうやって勉強するか、など、具体的なアドバイスが盛り込まれているので、とても参考になると思います。厳しい言葉もありますが、どんな仕事であれプロになるためには「覚悟」が必要だということも、学ぶべき大切なポイントでしょう。「各国語翻訳市場概観」という章もあって、英語のほか、フランス語・ドイツ語・イタリア語・ロシア語などの言語も扱われています。これを読んで「よし、ロシア語だ！」とひらめいてしまった方は、一緒にがんばりましょう(^_^)

街場のメディア論

内田樹 光文社新書

大学2年生向けに行った講義をまとめ直した本だそうですから、学生の皆さんは、自分たちに向けて話しかけられているように感じながら読むことができるのではないかと思います。「メディア論」と題されているのは、新聞やテレビといったマスメディアの現在と未来が中心テーマとなっているからですが、ここで語られている内容はもっと広く、自分の生き方を考える上でヒントになりそうなことがたくさん含まれています。特に第一講の、仕事と適性と天職についての話は、「就職活動」に突入する前にぜひ一読をおすすめしたいです。

ハラショーな日々

のんきなロシア人の夫・ワーニャとの暮らし

イワノワ・ケイコ ソフトバンククリエイティブ

ロシアやロシア人について知るための本は、その気になればかなりたくさん見つけることができますが、その中でも特に楽しい一冊をご紹介します。日本人女性のブログをまとめたもので、イラストに文章が添えられているのですが、ワーニャさんの天真爛漫な行動やアヤシイ日本語がとてもチャーミングです。一番好きなのは、タクシーに乗車拒否されたときのワーニャさんのひとこと。「もー、外国人だってニンジンなのに！」

初級革命講座飛龍伝

つかこうへい 角川文庫

つかこうへいが死んだ。大学2年の秋、高田馬場の東芸劇場で観た『飛龍伝』は、文字通り人生を変える体験だった。芝居がはねた後、「革命家」のなんたるかを理解し、原則を貫く生き方の大切さを思い知った。いつか公平な世の中が実現することを目指して今後も生きていきたいと思う。哀悼。

見ることの塩：パレスチナ・セルビア紀行

四方田犬彦 作品社

2004年の春と秋に行われた旅の記録。各三ヶ月ほどの短い滞在にもかかわらず、著者の社会を見つめる眼差しは深く痛切である。

「私の見ることは塩である。私の見ることには癒しが無い」（高橋睦郎）。表題と相まって、聖ゲオルギウスの龍殺しのイコンをあしらった装丁が秀逸である。

いまでも、君を想う

川本三郎 新潮社

著名な文芸・映画評論家による亡妻記。人は集い、人は散じる。
古き良き日本映画を想わせる「透明な悲しみ」が作品全体を包み、余情尽きるこ
とがない。

塩を食う女たち一聞書・北米の黒人女性

藤本和子 晶文社

私が学部生だった頃、黒人女性史の専門家の先生に紹介していただいた本で、その頃読んでとても印象深かった本を紹介します。

著者によれば、まずタイトルの「塩を食う者」とは、人生・生活において塩のような辛苦をあじわう人であると同時に、塩によって自らの負っている傷を癒す人のことです。20世紀後半に、経済発展のおくれたアメリカ深南部に住む人々のうち、黒人で、女性で、低所得者層に属する若者が、「アメリカ的な病ともいべき物質主義と鬱病」による「狂気」をどのように生きのびてきたのかについて、筆者がインタビューをもとに生の声をすくいあげています。

『『生きのびる』とは、人間らしさを、人間としての尊厳を手放さずに生き続けることを意味している。敗北の最終地点は人間らしさを棄てざるどころにあると。』(p.13) と述べる著者は、インタビューを通してインタビューー個人が「自分史と共同体の歴史を掘り起こす」(p.22) 現場で、彼女たちから学ぶためにじっと耳をすませました。

それは著者には次のような確信と期待があったからです。「彼女ら(黒人女性たち)は、また、個的な体験を、めんめんと過去に遡る生の軌跡や、魂から魂へ残された血のような英知の遺産に結びつけて、それとの関係において捉えることもできる人びとだろう」という確信と、そして「そのような彼女らの語り声は、わたしたちの背の向こうで、いつか声を与えよと待っている日本の女たちの生を掘りおこし、彼女らの名を回復しようとするわたしたち自身に力を貸してくれるかもしれない」(p.25) という期待が。

本書で展開される仕事、犯罪、家族間関係などの個別具体的な話の一つひとつから、「抑圧」「偏見」一辺倒の社会現実に対する捉え方・解釈ではない黒人女性独自の世界観、困難を生き抜く力、秘訣が伝わってきます。一箇所を深く掘り下げていけばいずれ地下の泉に到達できるように、個別のストーリーのそこに内在する声にたしかに耳を傾けることができれば、より広い共同体の世界観を捉えることが可能となるのかもしれません。そう考えて、私はマイクロ・ヒストリーに強い関心を持つようになりましたが、今振りかえてみればこの本がきっかけの一つだったの

かもしれません。余談ですが、マイクロ・ヒストリーの手法を用いた代表的な本で、とてもおもしろい作品に、『帰ってきたマルタン・ゲールー16世紀フランスのにせ亭主騒動』（ナタリー・Z・デーヴィス著）、『出口なお一女性教祖と救済思想』（安丸良夫著）、『チーズとうじ虫ー16世紀の一粉挽屋の世界像』（カルロ・ギンズブルグ著）などがあります。

いま改めて本書をひもときながら、耳を傾けるべき声が発せられたとき、それが何どきであれ、きちんと耳を傾けられる人でありたいという願いをあらたにしました。そして、この本を15年前に紹介してくれた母のような先生が、その4年後に大切な方を亡くして立ち直れないでいる私に、「(私が) もし傷ついていたら、それを救うのは「勉強」しかない! と応援するのが教師としてだけではなく、女としてのアドバイスだと思っています」と、A4サイズいっぱいにしたためたお手紙を結ばれながら、激励の言葉をかけてくださったこと、その後も先生のメッセージにどんなにか力づけていただいたかを思い出しました。

「誕生日がめぐってくるたびに、それは勝利のしるしになる。もう一年生きのびたということだけが重要なのではなくて、黒人の皆がわたしをもう一年生かしてくれたというような感じなの。個人的な意味だけではない、ということ」(p.127) と本書のインタビューイーが語ったように、私も自分を支えてくれているコミュニティに感謝しつつ、私がみなさんの年齢のころに受け取ったパトンの一つを、今この場をお借りしてこうしてみなさんに受けわたすことができれば幸せだと思っています。

星の王子さま—オリジナル版

サン＝テグジュペリ 内藤 濯訳 岩波書店

「サン＝テックス（アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリの愛称）の文学全体のエッセンス」（池澤 夏樹）である本書は、私の思春期からの愛読書です。今まで何度、手にしてきたことでしょうか。ひとつひとつの言葉をじっくり味わい、かみしめることのできる一冊です。愛読書を読み直すことは、人生の編みなおしを考え始める手がかりになるのかもしれませんが。思い立ったときに、本書を読み直してみたいかがでしょう。

さて、言の葉を味わう楽しみの一つとして、次の問題にチャレンジしてみませんか。

0. 以下の和訳（英訳：Anything essential is invisible to the eyes.）は、どなたによるものでしょうか？（解答は36頁です）

- ①「たいせつなものは、目に見えない」
- ②「いちばんたいせつなものは、目に見えない」
- ③「肝心なことは目では見えない」
- ④「大切なことは目には見えないんだよ」

ちなみに本学の図書館では、3種の翻訳を楽しむことができます。日本では著作権保護期間（国による違いも興味深いものです）を満了した2005年以降、新訳が十数社で出版されています。翻訳書と原書の読み比べへのチャレンジも、ぜひどうぞ！

戦下のレシピー太平洋戦争下の食を知る

斎藤 美奈子 岩波アクティブ文庫

あなたは、日本という国が70年ほど遡ると戦争下にあり、食料不足に陥って飢えに苦しんでいた国民（実際に体験されたお祖母さん・お祖父さんも…）がいたという事実をどう受け止めますか？

配給制の食料に工夫を凝らし、現在では想像できないようなものまで栄養源として食べていた時代が70年ほど前、この国にあったのです。本書では、昭和初期から戦後まで、当時の婦人雑誌『婦人之友』『主婦之友』『婦人倶楽部』に掲載されたレシピを、イメージしやすい写真や絵を用い、時代背景とともに出典一覧や食生活略年表なども含めて紹介されています。本書の出版にあたり、「戦争下における人々の暮らしは『銃後』でも『戦時』でもなく『戦』そのものだった。だから『戦時下』ではなく『戦下』のレシピなのである」と、新潟市出身の文芸評論家である著者は語りました。

本書をとおして日本の戦前・戦中・戦後の食生活を見つめることで、現在の食生活～生活全体を見直すきっかけにもなるかもしれません。本書の中のレシピを、頭と舌で味わってみませんか。

ことばと文化

鈴木孝夫 岩波書店

ことばのもつ不思議と多様な文化世界を知る良書です。虹の色の数など、様々な事例を挙げながら、ことばと文化のユニークさを浮き彫りにし、ことばが文化と社会の構造によって規定されることを具体的に立証し、ことばのもつ多彩な特質を社会言語学の立場から興味深く紹介されています。

34 頁の解答：

A. ①内藤 濯（あろう） ②河野 万里子 ③池澤 夏樹 ④山崎 庸一郎